①	郷愁	Nostalgia	2′ 43″
②	せせらぎ	Little Stream	5′ 30″
③	最後の珈琲	The Last Coffee	5′ 22″
④	冬枯	Wintry Scenery	3′ 32″
⑤	二十歳のエチュード	Étude Op.20	5′ 14″
⑥	ほたるの里	The Land Of Fireflies	5′ 24″
⑦	はっぴいばあすでい	Happy Birthday	3′ 57″
⑧	淡雪	Pale Snow	5′ 34″
⑨	二十二歳のランドスケープ	Étude Op.22	4′ 50″
⑩	きっといつか	Someday	7′ 34″

Instruments and Equipment:
Martin D-28, Gibson J-45, Aria A-35CE, Fender Stratocaster,
Epiphone Les Paul, FERNANDES REVOLVER, Roland A-300PRO,
KORG A5 GTR, ZOOM G1XN EXT, Roland CUBE Street, ZOOM L-12,
TASCAM TM-80, SHURE BETA57A, RAMSA WM-D55, National WM-400,
EDIROL UA-25, TASCAM US-2x2, COSMOTECHNO DJ-3000, marantz PM4200,
Technics SB-6, audio-technica ATH-WS550 & PCs

純粋時間

Ats.N

ノスタルジア
郷愁

久しぶりに見た夢は
暮れかけている西の空
川に沿った白い道
長い長い影法師

久しぶりに見た女性(ひと)は
薄紫のワンピース
少女らしさの前髪と
大人(おんな)らしさの後髪

たとえば苦い珈琲の
湯気に描いた思い出は
時間(とき)という名の風景画
遠くなるほど懐かしい

©1982 Ats.N

に聴こえるかもしれないが、納得がいくまでけっこう試行錯誤を繰り返して録音した。

はっぴいばあすでい

ある人の誕生日に唄を贈ろうと思いついたのだが、よく考えると「あなたのために作った」と言われるのは少々重いかもしれない。そこで、誰かの誕生日を祝う時に余興として披露する唄という位置づけになった。結婚祝い、卒業祝いなどそうした余興ソングがいくつかある。誕生日には例の定番ソングもあるが、少し趣向を変えたい時には重宝だ。

淡雪

長野県の中でも松本地方は豪雪というほどではない。それでも当時は、ひとたび積雪すると根雪となってなかなか解けなかった。どこにも去らず、硬く冷たく居座る。大変鬱陶しい。それがいつのまにかシャーベット状になり路面を濡らすようになる。それはそれで鬱陶しいのだが、春の到来を告げているようで嬉しくもあった。1981年の春、バンドのワンマンライブを行った際、第一部の最後にメンバー全員で演奏する曲として創った。作詞作曲の段階で演奏の編成まで考えたりしたのは、このときだけだったと思う。

二十二歳のランドスケープ

「二十歳のエチュード」を書いたとき、二十二歳でアンサーソングを書くと決めていた。どちらかといえば学生時代の終わりの方が節目となる。モラトリアムを十分に活用して、大人への準備がすっかり整っているはずだと思い込んでいた。ところが現実はそう簡単にはいかない。再びボクは打ちひしがれていた。今ならわかる。子供と大人の境界など存在しない。日々の積み重ねが人を鍛えるのみで、獲得できるものもあれば、相変わらず足りないものもある。あの時見ていた風景はどこまでも広く果てしなかったが、実は今もそうだ。

きっといつか

故郷を離れて見知らぬ土地で生活してみると、いろいろな人がいるものだなと気付く。同じ日本人でも文化の違いを感じる時がある。破天荒な人もけっこういた。同時に、それらの人たちに順応している意外な自分も発見できた。一生の宝と言える出会いと時間だったことは間違いない。今さら「きっといつか」と唄っても白々しいのだが、いとおしい気持ちが勝って、ちょっと長めのアウトロになってしまった。

2023.1.31 Ats.N

のような唄を書こうと思い立った。目に付くものを片っ端からメモして、それをパズルのように組み立てる。そうやってストーリーができてからメロディを添える。とてもありきたりの情景描写なのに妙に気取った字面の歌詞になってしまったのは、小説家ごっこの名残りなのだ。

冬枯

「冬枯のけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。」(徒然草)信州の冬は心を揺さぶる。「静」のようでいて「動」、「動」のようでいて「静」。色彩が乏しいくせに多彩な表情を見せる。その遷り変わりの中で、大切なものが失われるような焦りを感じる。だからこそ美しい。少し欧風にしたほうが合うように思って、音作りで工夫してみた。

二十歳のエチュード

詩人、原口統三は二十歳になるおよそ三カ月前に入水自殺した。彼の友人によって遺稿「二十歳のエチュード」が出版されたのは1948年のこと。ボクは大学に入学した1979年に角川文庫版を手にした。共感はしたけれど理解はできなかった。ただ、自分も二十歳になったら生きるか死ぬかの選択をすることになるのだろう。そして、生きるとすればどう生きるか、明確な意志表明をしようと決意した。ところが現実はそう簡単にはいかない。1981年、二十歳のボクは打ちひしがれていた。やはり練習曲を書かねばなるまい。そうやってコッソリ大人になったふりをした。青春はたいてい傲慢で卑怯でみっともない。

ほたるの里

長野県上伊那郡辰野町　の「ほたる祭り」を唄った。明治以来、何度も絶滅の危機にあった蛍を町ぐるみで守ってきたという。ボクが蛍の群れに囲まれて感動したあの日から40年以上たった今でも、初夏を彩る美しい風物詩を残してくれている。LPレコードではB面の1曲目となるはずだった。A面1曲目の「郷愁」と対になっている。この2曲は打ち込みを使わず、最初に録音した弾き語りをガイドトラックとしてギターやボーカルを複数重ね録りし、ベストテイクを選んでミックスダウンした。だからテンポは不揃いだが、その分ライブ感がある。学生時代から愛用してきたMartin D-28の開放弦の音色が好きで、なんとかこれを残したかった。簡単そう

せせらぎ

別れはいつも悲しくて
涙ひとつふたつ落としても
時間(とき)がやがて忘れさせる
寄せては返す出会いのため

あの頃愛した人も
今は遠い山の向こう側
声も姿も思い出せない
忙しすぎる暮らしの中で

一度も言えずに仕舞ったサヨナラ
素直な気持ちで口に出せれば

さあ　もう古いノート捨てて
白いページ書き始めよう

絶え間ないせせらぎのほとり
立ち止まれない時代(とき)の足音
岩にせかれたふたつの流れ
この先逢えるあてなどない

平たい小石を水面(みなも)に投げる
三つも跳ねたよ君が笑う

さあ　そんな記憶を載せて
セピアの歳月(としつき)静かに流そう

©1981 Ats.N

最後の珈琲

格子縞の珈琲茶碗冷めた茶卓が
辛うじて二人の間を繋いでる
三本目の煙草　僕が火を点けた時
君は何気なく壁の時計を見た

途切れ途切れに君へ向けて投げた言葉達が
自分自身の質量で沈んで行く
其れを一つ一つ丁寧に拾う様に
微かに頷き乍ら聴いている

君が　俯いてる（溜息吐く）
君が　嗚呼黙ってる

格子縞の珈琲茶碗不意に持ち上げて
諦めた様に又其処に置いた

窓硝子に映る君の横顔見詰めて
此れでもう終わりかなと感じている
立ち昇り揺らめく煙と僕の想い
天井の換気扇に吸い込まれて行く

泣き虫だった筈の君がこんな場面で
もう涙を見せぬ程大人に成ったね
何時も何時も擦れ違いだった二人には
こんな静かな別離がよく似合ってる

君が　席を立つ（出て行く）
君が　嗚呼遠ざかる

別れ際にもう一度だけ振り向いた君は
哀しい位にとても綺麗だった

©1983 Ats.N

で4年間暮らした大学生のボクが蟻ケ崎の学生寮や里山辺の農家の離れ、そして薄川沿いの木造アパートで書いた唄たちだ。まだ何者でもない頭でっかちな若者が未来への期待と不安に葛藤しながら、それでも持てる力のすべてを注いで創作した。概ね答え合わせが済んでしまった今となっては、当然同じ気持ちでは唄えない。あの頃のような無謀な情熱もさすがにない。だからあえて淡々と、この40年間ずっと頭の中で鳴っていたサウンドを忠実に再現しようと心掛けた。演奏にせよレコーディング技術にせよレベルは低いが、素人のボクがイメージできていた程度には聴こえるよう仕上がったと思う。

郷愁

企画当初から1曲目はアコースティックギター2本のフォークセッションと決めていた。「フォークソングとは？」という定義は当時でもあやふやだったが、自分はフォークだとずっと思ってきた。ストロークプレイのリズムとコード進行はすぐに決まった。アルバムの冒頭であることを意識しながら、メロディや歌詞も比較的スムーズに書けた。ところで、昔から歌詞の字面にこだわってしまうクセがある。できればルビも振りたくないのだが、正確な発音も伝えたい。面倒な性格だ。特にテーマに関わる「とき」は、アルバム全編に渡っていろいろな字を当てた。聴く分には全く意味ないけれど。

せせらぎ

当初のタイトルはもちろん「瀬を早み」だったが、滝川の力強さにならず看板を下ろした。半音進行のAメロで近景を、強引な転調のサビで遠景を表現した。和歌を詠むような心持ちで作曲したらこうなった。1990年、1インチテープの16トラックレコーダーを備えた貸しスタジオでこの曲を録音してみた。かなり理想に近い環境ではあったが、どうしても人の手を借りなければできないし、費用も結構かかる。ミックスダウンもしないままお蔵入りとなった。ただし、このときにアレンジは完成していたので、今回の作業はとてもはかどった。

最後の珈琲

大学の教養課程で受講した近代英米文学のテキストに、Dorothy Parkerの"THE LAST TEA"という短編小説があった。カフェのテーブルを挟んだ若い男女の会話劇だ。そのシチュエーションとタイトルが気に入ったので、当時常連だった喫茶店を舞台に短編小説

＃１１

1983年の秋、ボクはデモテープづくりを始めた。高校卒業時に仲間と制作した「青春譜」に次ぐ4年ぶりのアルバム企画だ。高校時代のまとめがあったのだから、大学時代のまとめもあるべきだろうという単純な発想だった。ただし、ボクは手段を有していなかった。バンド活動はすでにやめていたし、録音機材やスタジオにもあてがなかった。それに、これまでと同じことの繰り返しにはあまり乗り気でなかった。デモテープ以上のクオリティを望むならマルチトラックレコーディングは必須だし、最終的にはLPレコードとして形を残したいとも考えていた。もちろん、プロを目指していたわけではないので、当時の実情では夢物語に近い。ただ、このあと就職すればある程度の収入が得られるはずだし、きちんと調べれば何らかの解決方法が見つかるかもしれないと楽観していた。なにしろインターネットもない頃だから情報が限られており、かえって「そのうちなんとかなるだろう」と思える呑気な時代だった。結局、卒業までにデモテープを完成させただけで、企画は棚上げになった。

そんなわけで40年が経過した。時間軸方向へ激しく跳躍するが、その間に実際のスタジオ録音も試してみたし、MIDIシンセサイザやデジタルMTRなど新たな機器も使えるようになった。けっして「熱心に」とは言えないが、日常生活に埋没しつつもあきらめきれず模索を続けていた。そしてとうとう、近年では様々なデバイスがソフトウェア化されてPC上のDAWに統合され、かなり本格的なDTMが民家の8畳間に出現してしまった。テクノロジーの進歩は本当に驚きだ。40年前には想像もつかなかった。あとはやる気の問題だけだ。誰かと約束したわけでもなく、初志貫徹したところで自己満足に終わるのは重々承知の上だが、人生の課題研究として取り組んでみることにした。元来が怠け者なのでそこから5年もかかったが、こうしてどうにか完成品を見ることができた。もちろんデジタル録音なのだが、現代ではCDという物理媒体に載せること自体がアナログ的とも言えるだろう。当初LPレコードを想定していたのでブツにこだわった。所詮アナログ人間の昭和歌謡だ。見た目は違っても本質は変わらない。それでもこうして立派な形にできて、しかもタダ同然とは本当にテクノロジーの進歩はすごい。

制作にあたり当時の企画にほとんど手は加えていない。松本

＃４

冬枯

遠ざかる君の声が
耳の奥虚ろに響く
先刻(さっき)まで張り詰めていた
糸がパチンと切れた

忘れてた時刻(とき)を告げて
暮れなずむ夕陽に似て
茜色残したままで
そっとそっと隠れた

天気予報は雪か雨
窓の外は曇り空
表に出ようと思ったけれど
凍えた足が動かない

鏤めた記憶のかけら
懐かしさ僅かに薫る
古惚けて壊れたのに
ほらこんなに綺麗だ

二人して信じた道は
道標(みちしるべ)一つなくて
どちらかが疲れた時に
休む場所さえなかった

最後に涙見せたのは
僕の為にではなくて
言葉失くした君からの
想い出達へのサヨナラ

遠ざかる君の声と
舞い落ちる雪の白さ
昨日まで確かにあった
愛が崩れた

いつの日にか少女の殻を
脱ぎ捨ててこの部屋を
君が飛び出して行くことなど
知っていたはずなのに

©1981 Ats.N

＃５

二十歳のエチュード

いつも開いていた　いくら愛したとしても
「想い出」というアルバム　掴みきれぬものがある
故郷(ふるさと)懐かしむように　無駄と知ってるはずなのに
昔の頁(ページ)を辿る　また追いかけてしまう
人は時代(とき)を超えるから　フォークダンスのように
過去を引き摺ったまま　次から次へと
歩いて行けるはずもない　誰かと踊ったりして
だから忘れてゆく　また過ぎてゆく

人を押し退けて生きるのは　人を疑って生きるのは　人を傷つけて生きるのは
疲れるばかりで　これ以上嫌だ　やりきれないよ
未来の欠片(かけら)も見えはしない　たとえ騙されたとしても　自分独りの寂しさは
いつの間にか迷い子　騙すよりはマシだと　押さえつけられない

夢を喰べて生きられるなら　つまり弱さに絆(ほだ)されて　生きる術(すべ)さえ知らないまま
何処か遠くへ行きたい　逃げているだけかも　また歳を重ねる

©1981 Ats.N

＃１０

きっといつか

透きとおる風たちを　いつでも僕たちは　誰もが旅をする
その背に受けて　擦り切れジーンズ　憧れ抱いて
流れゆく時代(とき)の音(こえ)　洗いざらしの白いシャツ　陽の光　土の匂い
耳を澄ましてごらん　そして真新(まっさら)の夢　世界は僕たちのもの
ここまで駆けてきた　泣いたね　笑ったね　言葉を尽くしても
駆け抜けてきた　歌さえあれば　語れはしない
転んだり立ち止まったり　同じ瞬間(とき)分け合った　つまり　それぞれの行方
何度も振り返ったり　けれど今　別れ道　だから　それぞれの経路(みち)

きっといつかまた会えるね　きっといつかまた会えるね
君の輝くその瞳　君の輝くその瞳
サヨナラの悲しみは　サヨナラの悲しみは
思い出にしてしまえばいい　思い出にしてしまえばいい

きっといつかまた会えるね
君の輝くその瞳
サヨナラの悲しみは
思い出にしてしまえばいい

©1983 Ats.N

＃９

二十二歳のランドスケープ

蒼い空に向かって
背伸びしても
乾いた手に届くのは
空しい風ばかり

人と人の間で
暮らすことは
命すり減らしながら
罪を重ねること

たとえこの世が今すぐ
終わったとしても
悔いはないと言い切れる
そんな強い生き方があるだろう

いつも夢に見ていた
遠い国は
思い出の彼方にある
故郷(ふるさと)の化身

愛は壊れて消えた
冷たい朝に
残る真実もやがて
嘘に置き換えられる

今はこんなに小さな
一粒の愛が
いつか大きな花咲かす
そんな淡い約束が欲しかった

いつも憧れていた
優しい女性(ひと)は
思い出にうずもれた
甘い母の香り

©1983 Ats.N

＃６

ほたるの里

夕暮れ迫る川のほとり
ようやく漂う涼風(すずかぜ)
小さな家並みひとつふたつ
淡い光が影絵をつくる

淀みに浮かぶ泡沫(うたかた)は
生まれては消えまた生まれ
人の生命(いのち)の頼りなさ
人の愛の心許なさ

やがて辺りに闇が降りて
水面(みなも)に蛍達が舞う
蒼く白くその灯火(ともしび)
声もなく唄う愛の調べ

星の欠片(かけら)掻き集めて
鏤めたような蛍
ほんの儚い運命(さだめ)に
ひたすら夜を遊ぶ

何気なく僕が差し出す手に
縋るように結んだ君の手
風を孕んだ長い髪
掠めて飛んだひとつの点

暗い足もと気遣うように
俯きがちに歩く君の
聞こえぬくらいに小さな呟き
「夜道がこのまま続けばいい」と

©1982 Ats.N

＃７

はっぴいばあすでい

Happy birthday to you
薄紙かさねるように
君の時計は進む
若い足音たてて

Happy birthday to you
降りしきる木洩れ陽に
身を委ね　目を伏せて
風の息吹聴こう

誰にでも一度は
めぐるこの季節
今　羽ばたかなければ
今　飛び立たなければ

Happy birthday to you
水鏡に映す
青い空　青い夢
君のあした輝け

Happy birthday to you
人として生まれて
人の世に生きる
小さな愛を育てて

Happy birthday to you
膨らんだ胸の奥
熱くなれ　熱くなれ
君のあした輝け

熱くなれ　熱くなれ
君のあした輝け

©1982 Ats.N

＃８

淡雪

サヨナラの手紙
届いた朝
僕の街では
雪模様

子供の笑い声
学生の急ぎ足
時間の緩い流れの中
いつもの暮らしの始まり

「遠く離れてしまえば
終わる」と言った
君の残像が今
繰り返し反響する

落ちてくるのは雪ばかり
僕の目の前に降り積もる
落ちてゆけ この淋しさ
忘却の彼方へ

夕べの残りグラス
琥珀の水の中
映る淡雪
たおやかに舞う

真白なその光
右手でかざしたけど
浮かぶ過去が眩しすぎて
わずかに目眩を感じる

先に歩み始めたのは
君の方だった
今も愛していると
空をめがけて叫ぶ

落ちてくるのは雪ばかり
僕の目の前に降り積もる
落ちてゆけ この淋しさ
忘却の彼方へ

落ちてくるのは雪ばかり
僕の心にも降り積もる
落ちてゆけ この淋しさ
忘却の彼方へ

日陰の雪道が
くしゃくしゃするので
じきにまた
春が来るんだなと思う

©1981 Ats.N

Pure Time

ten pieces of sentiment from my acoustic space

Written and Performed by Ats.N

Nostalgia
Little Stream
The Last Coffee
Wintry Scenery
Étude Op.20
The Land Of Fireflies
Happy Birthday
Pale Snow
Étude Op.22
Someday

COMPACT disc+ DIGITAL AUDIO

NOT FOR SALE

℗2023 arumakan. All rights reserved. 23.01.31 ⓁⓍ

Pure Time Ats.N

Pure Time Ats.N

Pure Time
COMPACT
disc+
DIGITAL AUDIO
Ⓟ2023
arumakan
Ats.N